

街中の映画館の存在意義に関する研究

A study about the significance of cinema in urban area

04M43160 谷 武郎
Takeo Tani

指導教員 土肥 真人
Adviser Masato Dohi

SYNOPSIS

Recently it has been diversified the way of watching movies and the number of screen is increasing, for cinema-complex is constructed and popularized. The purpose of this thesis is to clarify the significance of existence of cinema in urban area. I surveyed the trend of movies and the visitor's consciousness. The findings are as follows, 1.the category of movie which people want to watch in the cinema of town is the one showed from 1950's to 1970's, 2.the situation of cinemas shows an aspect of losing city identity.

1章 研究の背景と目的

1-1 背景・目的

近年、ビデオやDVD等、映画鑑賞手段が多様化し映画館も多様化する中、シネマコンプレックス（以下シネコン）

(1)の登場・普及によりスクリーン数は増加に転じたが、単館を中心とした従来型既存映画館の淘汰がますます進行している。シネコンの展開は、日本初のシネコンとして1993年4月に海老名に開業した「ワーナーマイカルシネマズ海老名」のような郊外型ショッピングセンターをはじめとする商業施設へ複合して商業施設における集客の核として機能していたが、最近では都市部の中心に立地し、街における集客の核として機能しているのが現状である。

そこで本研究では、現在の映画館・映画業界の実態を把握し、過去の上映映画作品の変遷・映画の内容・鑑賞方法に着目した。映画鑑賞者の意識調査から、街中の映画館の存在意義を検証したい。

1-2 研究方法

第2章では、文献調査から映画業界における配給・興行の仕組み、全国の映画館の変遷を把握。第3章では映画鑑賞者による行動の想定法により上映作品が映画鑑賞者の鑑賞方法・鑑賞前後の行動に及ぼす影響とその意識を把握、

第4章で社団法人映画製作者連盟⁽²⁾のHP・キネマ旬報⁽³⁾のデータベース・雑誌「キネマ旬報」・雑誌「ぴあ」⁽⁴⁾などの資料調査による

各映画館での上映作品を把握し、第5章では、これまでの成果を踏まえて街の映画館の存在意義について考察する。

1-3 研究の位置づけ

遠山ら¹⁾は、街中に存在する芸術施設として劇場に注目し、銀座・渋谷・所沢の3都市における鑑賞者の行動の分布を劇場からの距離から分析している。

映画作品を取り上げた研究として、関口ら²⁾のものがある。イメージ分析を行なうためのデータ処理として、関連性のある事象を集め解釈が可能な全体像を把握するKJ法を用いて地下空間のイメージを分析している。

本研究は芸術作品の鑑賞前後の行動と周辺環境の関係に着目する点では遠山らと同じ立場を取るが、①映画が芸術としての要素だけでなく商業的な要素をもつ事、②映画館における暗闇が街にいながら非日常性を体験できる事から、映画館を取り上げ、空間的な配置からの視点ではなく、映画鑑賞者の意識から街中にある映画館の、存在意義の再考を行なうものである。

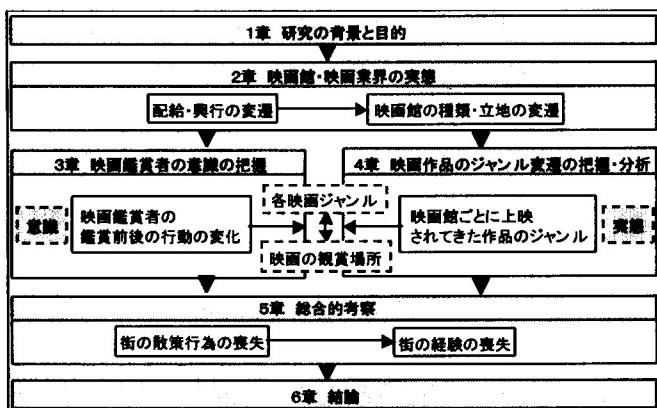
2章 映画館・映画業界の実態

2章では全国における映画館の変遷をシネコンが日本に開業した1993年以降を中心に把握する。また、日本映画のビジネスにおける、制作、配給、興行（映画館）の3つの部門についてまとめ、映画業界の実態を把握する。

2-1 興行形態と興行ネットワーク

現在の興行形態には、ブロック・ブッキングとフリー・ブッキングという2つの形がある。前者は、あらかじめ公開の初日と最終日が決まっている興行で、後者は初日と最終日が決まっていない興行形態を言う。

一方フリー・ブッキングは上映作品が一定の入場者数を維持していれば上映を続けられるメリットがある。このフリー・ブッキングは東宝・東映の邦画番線を除く全ての興行と言えるようになっていて、大きく分けると拡大系と単



【図 1-1 論文構成図】

館系に分けられ、最近はその間にシネコンが加えられる。拡大興行とは、メインの劇場（チェーンマスター）とそれに連なるチェーンのことで、現在、フリー・ブッキングのチェーンは、【表2-1】のようになっている。

【表2-1 ロードショー館の興行系統】

邦画系	チェーン名		映画館名	開館年
	拡大公開	東映系	丸の内東映	
東宝系		丸の内東宝	日劇2	1984
日比谷スカラ座系		日比谷スカラ座		1955
ニュー東宝シネマ系		ニュー東宝シネマ		1957
日劇1系		日劇1		1984
日劇3系		日劇3		1984
日比谷映画系		日比谷映画		1984
みゆき座系		日比谷みゆき座		1984
渋谷東急系		渋谷東急		1956
丸の内ピカデリー1系		丸の内ピカデリー1		1984
丸の内ピカデリー2系	丸の内ピカデリー2		1984	
丸の内ルーブル系	ルーブル丸の内		1987	

2-2 全国のシネコンの推移

2000年頃にシネコンは急速に増加したが、最近は落ち着いてきている【表2-2】参照。

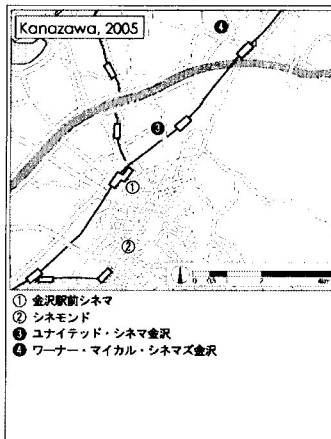
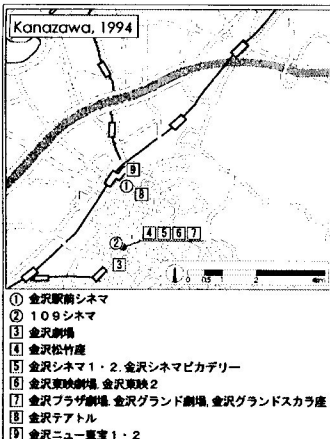
全国のシネコンの割合は【表2-3】のようになっている。シネコンの普及により、現在93%と一番高い割合を占めている石川県等の地方の街中の映画館は廃業に追い込まれていった。またスクリーン数が200近くある愛知県や神奈川県でも、それぞれ81%・80%も占め、100以上のスクリーン数がある大都市でさえ東京都以外65%~80%とシネコンの割合が大きい事が分かる。以下に石川県の映画館の立地の変遷【図2-1】・【2-2】参照 中心市街地から映画館が撤退し、郊外へと移転している事がわかる。

【表2-2 過去5年間の映画館概況の推移】

	2004年	前年度	2003年	前年度	2002年	前年度	2001年	前年度	2000年
映画館数	2825	105.40%	2681	101.70%	2635	101.90%	2585	102.40%	2524
シネコン	1766	115.20%	1533	109.80%	1396	110.90%	1259	112.10%	1123
その他	1059	92.20%	1148	92.70%	1239	93.40%	1326	94.80%	1401
シネコン比率	62.50%	-	57.20%	-	53%	-	48.70%	-	44.50%
シネコンサイト数	215	113.20%	180	109.20%	174	109.40%	169	109.70%	145

【表2-3 全国のスクリーン数(2005年)】

都道府県	スクリーン数	シネコン			都道府県	スクリーン数	シネコン			都道府県	スクリーン数	シネコン		
		館数	スクリーン数	割合(%)			館数	スクリーン数	割合(%)			館数	スクリーン数	割合(%)
全国	2825	215	1766	63	山梨県	24	2	13	54	鳥取県	16	1	6	38
東京都	275	13	111	40	静岡県	66	4	30	45	島根県	10	1	5	50
神奈川県	181	17	145	80	滋賀県	204	17	185	91	山口県	36	3	21	58
千葉県	139	10	91	65	岐阜県	53	4	40	75	徳島県	14	1	8	57
埼玉県	104	9	75	72	富山県	36	4	29	81	香川県	17	2	14	82
静岡県	44	4	38	86	石川県	27	3	28	93	愛媛県	47	6	40	85
栃木県	41	3	25	61	福井県	34	2	17	50	高知県	18	1	9	50
茨城県	52	3	19	37	三重県	54	5	40	74	福岡県	152	12	117	77
群馬県	36	1	7	19	大分県	177	12	98	55	佐賀県	21	2	15	71
宮城県	71	6	58	82	京都府	39	2	15	38	長崎県	25	2	15	60
岩手県	24	1	7	29	兵庫県	97	5	37	38	熊本県	43	4	32	74
青森県	51	5	38	75	愛知県	35	5	30	86	大分県	34	3	27	79
秋田県	25	2	13	52	奈良県	40	5	35	88	宮崎県	19	0	0	0
山形県	29	3	20	69	和歌山県	27	1	10	37	鹿児島県	24	2	16	67
新潟県	55	5	40	73	岡山県	30	1	10	33	北海道	129	11	86	67
長野県	59	4	25	42	広島県	63	4	32	51	沖縄県	28	2	17	61



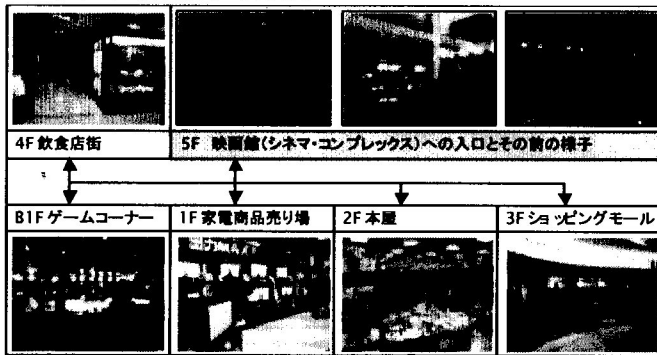
【図2-1 1994年の映画館分布】

【図2-2 2005年の映画館分布】

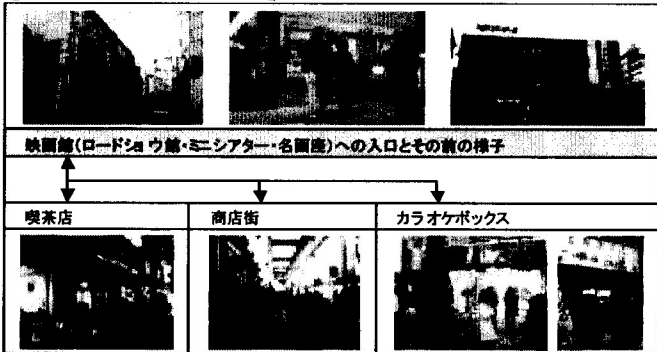
3章 映画鑑賞者の意識の把握

3-1 映画鑑賞前後の行動調査

映画鑑賞者の映画鑑賞の前後の行動を把握する為、映画鑑賞前後のシーンを想定してもらいながら、シネコンで鑑賞する場合・街中の映画館で鑑賞する場合のそれぞれで、シーンI(映画鑑賞場所までの経路)・シーンII(映画鑑賞場所付近に到着してから映画開始まで)・シーンIII(映画終了後)での行動を選択してもらった。その際にシーンの写真図を用意した。【図3-1】【図3-2】参照。なお、本調査における調査日時・調査項目・回答者のフェイスデータは【表3-1】に示した通りである。



【図3-1 シネコンのシーン】

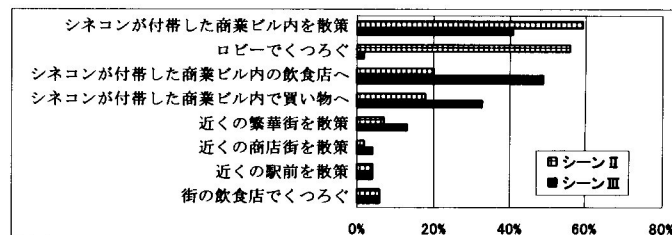


【図3-2 街の映画館での映画鑑賞前後の行動】

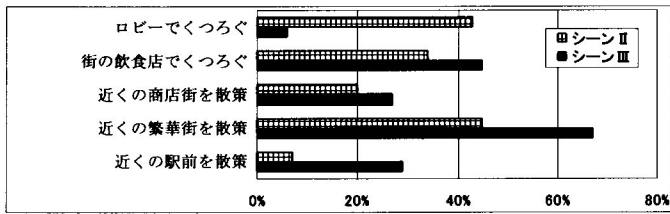
【表3-1 調査概要】

調査時期	2005年12月-2006年1月
回答者数・性別	106名(男性49名、女性57名)
回答者の年代	20歳以下21人、30代24人、40代21人、50代23人、60歳以上17人
回答者の職業	会社員・公務員29、自営業2、アルバイト5、学生18、主婦34、無職16、その他2
調査項目	【映画鑑賞・映画館来訪頻度】【映画鑑賞前後の行動(映画館の種類ごと)】【街と映画館の関係】【利用する映画館と決定要因】【よく見る映画ジャンル】

映画鑑賞前後の行動に関する調査結果は以下の【図3-3】【図3-4】のようになった。シネコンではシーンII、シーンIIIともにシネコンが付帯した商業ビル内での行動が多い事が分かった。シーンII・シーンIIIを比べると、飲食店や買い物のような、目的を持った行動がシーンIIよりシーンIIIの方が多くなるのに対して「シネコンが付帯した商業ビル内を散策」の回答はシーンIIよりシーンIIIの方が少なくなる事が分かった。街中の映画館ではシーンIIIで2/3の人が「近くの繁華街を散策する」と回答している事、シーンII・シーンIIIを比べると、映画鑑賞後のほうが街中へ行動する傾向が強い事が分かった。



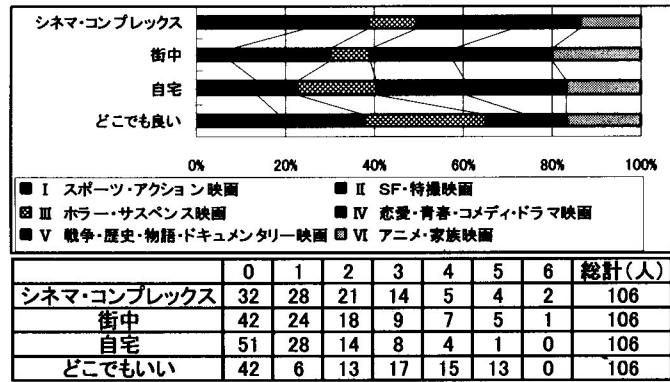
【図3-3 シネコンでの映画鑑賞前後の行動】



【図 3-4 街の映画館での映画鑑賞前後の行動】

3-2 映画の各鑑賞場所とジャンルの関係

好きなジャンルとその作品を想定しながら、それにふさわしいと思う映画鑑賞場所を「シネマ・コンプレックス」「街中の映画館（ロードショウ館・名画座・ミニシアター等）」「自宅（レンタルビデオ・インターネット・DVD）」「N.A.」の4項目の中から1つずつ選択してもらったものを集計し直し、なお「N.A.」とは何も選択しなかった場合の数を表している。



【表 3-2, 図 3-5 映画の鑑賞場所-ジャンルクロス】

シネコンで映画を鑑賞するのにふさわしいと考えられているジャンルはIとIVが多く、街中の映画館の場合はジャンルII・IV・V・VIが、自宅の場合はジャンルV・IV・III・VIの順に多く回答した人がいた。また、どこで鑑賞しても変わらないと考えられている場合はN.A.とカウントした結果、ジャンルIV・Vは少なかった。つまり、どこで鑑賞するかをイメージしやすいジャンルと言える。

4章 過去の映画作品のジャンル変遷の把握・分析

4章では過去の作品のジャンル変遷を把握する。研究方法の箇所に掲載した過去の映画雑誌・HP等から、各映画館での上映作品を調査した。なお、対象期間は1955年から2004年とし、資料の制約⁽⁴⁾から、その期間を1955年から1980年以前と1980年から2004年の2期間に分けて考える事とする。

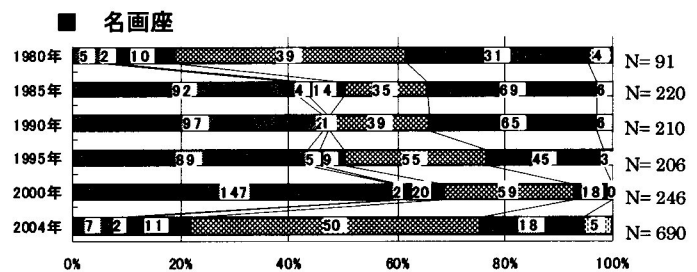
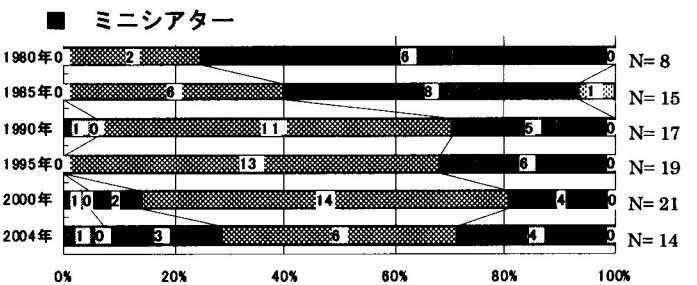
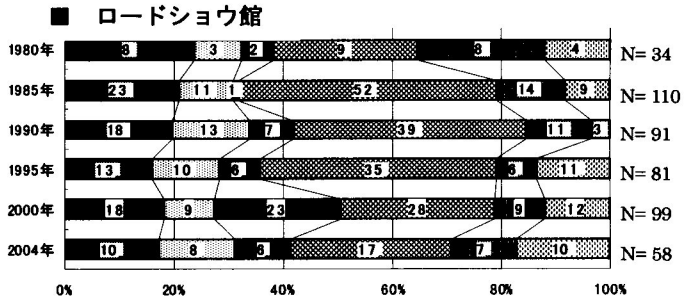
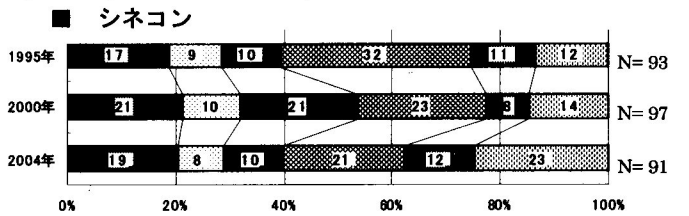
①シネコンの上映作品はアメリカ等で興行的にヒットしたものを優先的に上映しているため、どのシネコンでもほぼ同じ傾向になっている。そこで1994年に日本で最初に設立した「ワーナー・マイカル・シネマズ・海老名」での上映作品の変遷を見ることとする。これらの映画館で上映された映画作品を年ごとにジャンル分けしたものの割合変化を表すと【図 4-1】のようになった。ジャンルVIの割合が少し多くてそれ以外は全体的には均等な割合で作品が上映されていることがわかる。

②ロードショウ館はいくつかのチェーンが存在するが、各チェーンごとの上映作品はチェーンマスター館の上映作品に連動するので、チェーンマスター館の中から対象とする映画館を抽出した。これらの映画館で上映された映画作品を年ごとにジャンル分けしたものの割合変化を表すと【図 4-2】のようになった。ジャンルIVの割合が少し高いが全体的に見ると、大きな変化の傾向なく作品が上映されている

ことがわかる。

③ミニシアターはアート系といわれる作品を上映するという点で共通するので、ジャンルの大きな差がないと思われるため、古くから開館しているミニシアターの中から「岩波ホール」と「シネマスクエアとうきゅう」を選出して傾向を見ることにした。これらの映画館で上映された映画作品を年ごとにジャンル分けしたものの割合変化を表すと【図 4-3】のようになった。ジャンルIV・Vの作品がほとんどであるが、近年はジャンルI・IIIの作品も上映するようになってきていることが分かる。ジャンルII・VIの作品は上映される事はほぼないと言える。

④名画座は、主に全国で公開が終わった映画を2～3本立てで上映していて、上映作品を比較的新しい洋画を中心にプログラムする映画館と、古い邦画を中心にプログラムする映画館に大別することができる。そこで、前者の代表として「早稲田松竹」を、後者の代表として、現在は「K's-cinema」というミニシアターになってしまった「新宿昭和館」を選出した。これらの映画館で上映された映画作品を年ごとにジャンル分けしたものの割合変化を表すと【図 4-4】のようになった。特に1985年から2000年にお

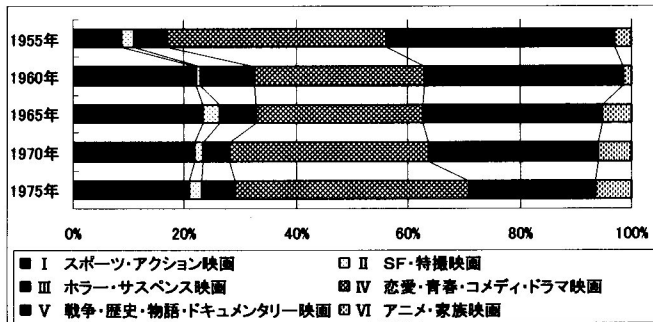


対象となるジャンル：
 I スポーツ・アクション映画 II SF・特撮映画
 III ホラー・サスペンス映画 IV 恋愛・青春・コメディ・ドラマ映画

【図 4-1 映画館ごとの映画作品のジャンル別割合変化】

いて分かる事だが、ジャンルIの割合が高い。その他にジャンルIVには増加傾向、ジャンルVには減少傾向がある。

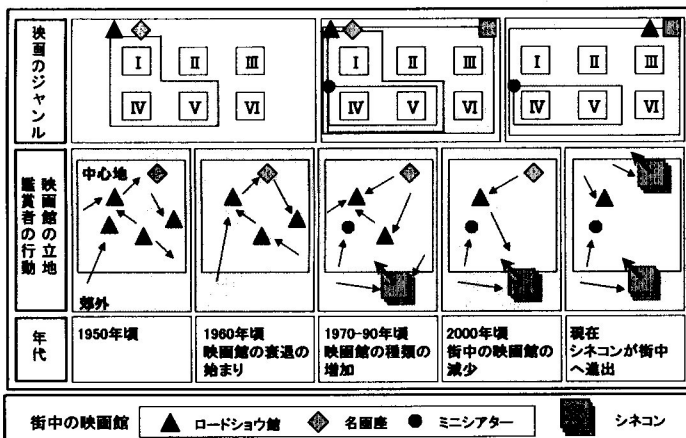
⑤1980年以前は、近年のような全国9大都市を中心としたそれぞれの興行チェーン網からは外れた「ローカル」と呼ばれる地域での、それぞれ独自の興行会社や個人館主が経営する映画館が多かったため、全国で上映している映画作品を一部の映画館の上映作品から把握する事は難しいため、その年に上映された映画作品のデータを網羅したデータ³⁾を利用した。1955年はジャンルIV・Vが主流で上映されていたが、1960年以降はジャンルIVが主流にあって、その次にジャンルI・Vが上映されていることが分かる。その年に上映された映画作品のデータを網羅したデータ³⁾を利用した。1955年はジャンルIV・Vが主流で上映されていたが、1960年以降はジャンルIVが主流にあって、その次にジャンルI・Vが上映されていることが分かる。



【図4-2 1980年以前の映画作品のジャンル別割合変化】

5章 総合的考察

ここまで把握した内容を時系列で追いかけてみながらまとめてみる。昔、街中には娯楽があまりなく街の皆が映画館で楽しんでいて(1960年代)。ミニシアターという特殊な映画ばかりを上映するような映画館が出現してくる(1970年代)。その後テレビやビデオが各家庭にまで普及し、映画産業・映画館が廃れていった(1980年代)。そして、シネコンが郊外に出現し映画業界全体は持ち直したが、街中の映画館の荒廃には拍車がかかった。映画館は街中の映画館からの郊外や商業ビル内を中心としたシネコンへ移り(第2章)、映画鑑賞をともなった散策行為が街中から消えて街の散策行為が街中の映画館と共に減少した事によって街の経験が失われたと言える(第3章)。映画館の種類が増え(第2章)、各映画館で上映作品にジャンルの傾向が出てきたが近年は各ジャンルを均等に上映しているシネコンの影響で全体的に上映作品のジャンルが均等化している(第4章)。以上の事実を踏まえて、映画ジャンルをどこで見たかという映画鑑賞者の意識(第3章)と映画館ごと



【図5-1 総合考察図】

の上映作品ジャンルの実態(第4章)を比較した。その結果、街中で上映していたジャンルに対し今でも意識が高いが現状は全体的に上映作品数が足りないという現状を把握できた。かつては家族や友人と映画を見に行くと言えば、街中の映画館に気軽に寄るのが普通だったが、郊外のシネコンへ行くようになっていった。しかし、近年、シネコンが商業施設ごと街に戻ってきたが以上の事を考慮するならば以前のような映画と街が一体の関係とは言えないことが分かった。シネコンの存在は映画界よりもむしろ街へ大きな影響を与えているのではないだろうか、「個性のないシネコンを容易に受け入れる」現代の都市から考えさせられる。また、ミニシアターや名画座こそがシネコンとは違い街中になじんでいる本当の街中の映画館と言えるだろう【図5-1】。

6章 結論と今後の課題

本研究の結論は以下のようにまとめられる。

- ・過去の映画館の上映作品を調査しジャンルの変遷を概観した結果 1980年頃を境に映画館の上映作品の傾向が変化している。
- ・映画の内容からジャンルを6つに分けて意識調査を行った結果、街中で見たいとされた映画ジャンルは、かつて上映されていたジャンルだった。
- ・近年、映画のスクリーン数が増加したが、これはシネコンの台頭による影響が大きく、結果としては街中の映画館は減少している。
- ・映画鑑賞後にはシネコンでは同一建物内での行動が想定され、街中の映画館では街での散策・買い物等の行動が想定されていた。

近年、形態変化が著しい映画館を見た結果、「街中の映画館」とは、商業施設と一体化したシネコンのような映画館は含まれないと定義する事ができ、街の商業施設が次々とチェーン化している現状から都市間の個性の差がなくなっているという現代の問題提議ができた。また、チェーン化している様々な商業施設の中でも、特に映画館についてのチェーン化は、「映画」と「街の経験」の密接性から、街中の映画館の喪失から街の経験が失われていると言えるであろう。

【補注】(1) 同一運営組織が同一所在地に5スクリーン以上集積して名称の統一性をもって運営している映画館 (2) 戦時中の統制によって作られた団体が次々と解散を命じられて荒廃した日本映画の存続と復興を行うため、当時企業統制によって残った劇映画3社(松竹(株)・東宝(株)・大日本映画製作(株))、ニュース短篇教育映画4社((株)朝日映画社・(株)電通映画社・理研科学映画(株)・合資会社横浜シネマ)の任意団体として1945年12月1日「映画製作者連合会」として発足。その後改称・改組を経て現在の会員は松竹(株)・東宝(株)・東映(株)・角川映画(株)の4社。社団法人映画製作者連盟 HP: <http://www.eiren.org/toukei/index.html>

(3) 1919(大正8)年に創刊され、現在まで続いている映画雑誌として、日本では最も古い歴史を誇る。キネマ旬報全映画作品データベース: <http://www.walkerplus.com/movie/kinejun/> (4) ぴあ株式会社によって1972年7月から各週に創刊されている日本で最初に上映映画作品を紹介し始めた雑誌 (4) 上掲した雑誌「ぴあ」の入手可能期間は1977年からであった

【参考文献】1) 遠山、添田、大野「劇場の周辺環境と鑑賞前後の行動との関係」2003年度9月日本建築学会大会学術講演梗概集 p1127-1128 2) 関口、北村「現代映画における地下空間イメージの分析」、1997年度第32回日本都市計画学会学術研究論文集 p307-312 3) 補注(3) 参照